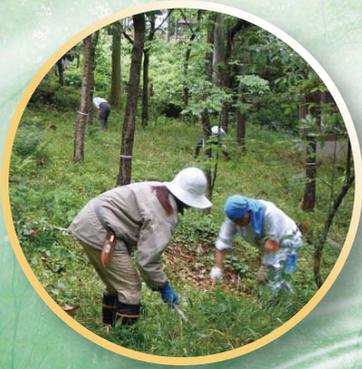


# 生きものにぎわいづくり

～ 社会資本における生物多様性の促進～



【編集・発行】国土交通省 総合政策局 環境政策課  
tel.03-5253-8111 (代表)

【制作協力】株式会社 森里川海生業研究所

このパンフレットは古紙配合率100%再生紙と  
環境にやさしい大豆油インキを使用しています。



平成24年3月

## 生きものにぎわいづくりのすすめ

地球上には数千万種にもぼる生物があり、日本にも約10万種の生物が息づいています。多種多様な生物は相互に関係しあって地域の自然のバランスをとり、私たちの衣食住の恵みや災害の起きにくい安全な環境の基盤となり、また地域固有の文化やなりわいを育ててきました。

生物多様性の保全は、安全な生活基盤のために、また個性豊かな地域づくりのために、取り組むべき重要な課題です。今、自治体や市民、学校や企業等、さまざまな主体による生物多様性保全活動がはじまっています。多様な主体が地域で連携して保全活動を行なうことで、地域レベルのきめこまかい生物多様性の保全が期待できるとともに、地域コミュニティが強化され、地域の活力がうまれます。

平成22年10月の生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)では、「新戦略計画(愛知目標)」に加え、「民間参画の推進」や「自治体の取組の強化」について合意されました。また、同年「地域における多様な主体の連携による生物の多様性の保全のための活動の促進等に関する法律(生物多様性地域連携促進法)」も成立しました。日本全国で、地域性豊かな生物多様性保全活動を促進することが期待されています。

生物多様性の保全は、活動する市民に地域への愛着や仲間づくりを促し、地域コミュニティを定着させ、いきがいつくりへとつながります。子どもたちにとっての環境教育になり、地域の防災につながり、自然の恵みを活かしたなりわいや、観光振興、まちづくりへとつながっていきます。このパンフレットは、15の事例を紹介し、皆さんの地域の「生きものにぎわいづくり」のヒントとなることを目指しています。



## 生きものにぎわいづくりを進める5つのポイント

### 1. フィールド・・・地域の宝をみつけよう!

地域の自然や魅力について調査し、その価値を確認しましょう。専門家などのアドバイスによって、地域固有の自然や魅力を再発見できるかもしれません。

### 2. 活動の担い手・・・なかまをつくらう!

生物の生息空間の保全・再生・創出や維持管理などの活動には、多くの人の力が必要です。さまざまな個人・団体と連携し、みんなで活動を広めましょう。

### 3. 目標設定・・・みんなの思いをかたちにしよう!

さまざまな個人・団体が協働・連携するには、目標の共有が必要です。誰にでもわかりやすく、具体的な活動に活かせる目標を設定しましょう。

### 4. 合意形成・・・多様性を認め合おう!

さまざまな個人・団体の立場や考え方の違いを認め合ったうえで、お互いに助け合い、目標を共有し、活動を強固なものとしていきましょう。

### 5. モニタリング・・・活動の成果を見える化しよう!

定期的にモニタリングを行って、活動の方向性を確認しましょう。活動の成果を確認すると、やりがいにつながります。モニタリングの結果を公表し、活動の意義を広めましょう。

## 目次

### 生物多様性でつなく いきがいつくり

1. 生きものボランティアは市民の楽しみ 野山北・六道山公園(東京都)…2
2. 雪国越後の里山再生 国営越後丘陵公園(新潟県)…4

### 生物多様性でつなく 環境教育

3. 港陽小学校の海苔づくり お台場海浜公園(東京都)…6
4. テラス型干潟を用いた環境共生型護岸 潮彩の渚(神奈川県)…8
5. 干潟の小さな博物館と自然観察プログラム 重富干潟(鹿児島県)…10

### 生物多様性でつなく 防災

6. 全住民で流域治水に取り組み水循環を再生 樋井川(福岡県)…12
7. 氾濫原再生で治水と自然再生を両立 アザメの瀬(佐賀県)…14
8. 高潮対策と干潟保全を実現したセットバック護岸 中津干潟(大分県)…16

### 生物多様性でつなく なりわい

9. グラウンドワーク方式で河口干潟を再生 鶴川(北海道)…18
10. よく利用されかつ美しい川を目指す 矢作川(愛知県)…20

### 生物多様性でつなく 観光振興

11. サクラをまちのシンボルに 弘川寺歴史と文化の森(大阪府)…22
12. 「川は住む人の顔」ホテル舞川を地域で守る 一の坂川(山口県)…24

### 生物多様性でつなく まちづくり

13. 町民手づくりの里山再生 ハサンベツ川(北海道)…26
14. 市民・大学・行政の連携で流域再生 重信川(愛媛県)…28
15. 憩いの森を市民が保全・整備 油山自然観察の森(福岡県)…30

### 生きものにぎわいづくりのQ&A…32

- 国土交通分野における生物多様性保全の取組の普及に向けて
- 生物多様性に関するインフォメーション



## 事例のみかた

**活動で保全されている主な生物種について、環境省レッドデータブックのカテゴリとともに示しています。**

**5つのポイントのうち、「2. 活動の担い手」「3. 目標設定」「4. 合意形成」「5. モニタリング」について、事例の活動からどんなヒントをもらえるか、示しています。**

**活動によってもたらされるものについて、「いきがいつくり」「環境教育」「防災」「なりわい」「観光振興」「まちづくり」の6つの項目で整理しています。地域づくりに役立てるときの参考にしてみてください。**

**事例の活動の主なフィールドと位置を示しています。**

**活動のタイムフレームについて、スタート・展開・目標の再設定などのタイミングやきっかけがわかりやすく図式化しています。**

**生きものにぎわいづくりに関する基本的なキーワードについて、事例に合わせて解説しています。**

# 生物多様性でつなぐ “いきがづくり” 生きものボランティアは市民の楽しみ

フィールド 野山北・六道山公園 (東京都武蔵村山市・瑞穂町)



タイムフレーム



## 1 荒廃した里山を復活させるために市民が活動を開始

都心部から50キロ圏にある狭山丘陵は、高度経済成長期に開発が進められました。人が利用しなくなり荒廃した里山は、廃棄物置き場となり、宅地開発の動きもありました。昭和63年、狭山丘陵をモデルの一つとした映画「となりのトトロ」が公開され、里山への関心が高まりました。「トトロの森」のような豊かな自然を守りたいという市民の思いを受け、東京都は丘陵地を公園にすることを決定しました。都立公園開設に伴う整備では、ダンプカー9,000台分の廃棄物が撤去されました。



▲映画『となりのトトロ』をほうふつとさせる風景

## 2 市民の自主的なボランティア活動を育む

市民の思いを形にできる公園を目指して、東京都は「里山教室」を開いて市民ボランティアの育成をはじめました。この教室をきっかけに、市民ボランティアによる公園管理への自主的な参加が活発化しました。雑木林ボランティアや外来植物を引き抜くグループなど多彩な活動が、共通の目標である「里山絵図」の実現を目指して練り広げられています。



▲「里山絵図」2006年版



▲「里山絵図」2011年版

### 【狭山丘陵】

埼玉県と東京都の都県境に広がる約3,500haの緑地。東京都の水がめである狭山湖(山貯水池)・多摩湖(村山貯水池)の水源保護林として保護されてきた。高度経済成長期、大規模なレジャー開発・宅地開発に反対して、多くの自然保護の市民団体が設立された。

### 【映画『となりのトトロ』】

昭和63年に公開された宮崎駿監督の長編アニメ映画。狭山丘陵最東端の八国山周辺が舞台のモデルとされた。狭山丘陵は、「トトロの森」というイメージによって、保護活動を喚起した。

### 【主な保全種】

トウキョウサンショウウオ:絶滅危惧Ⅱ類(VU) オオコガナ:準絶滅危惧(NT)  
オオアブメ:絶滅危惧Ⅱ類(VU) ミズコバ:準絶滅危惧(NT) など  
タコノアシ:準絶滅危惧(NT)



【目標設定】  
里山絵図で  
目標像を共有



【モニタリング】  
GISで  
モニタリング  
データを蓄積

## 3 役割分担で適確な保全マネジメント

公園の管理は、各団体の得意分野を活かすパークマネジメントの考え方が取り入れられています。ハードの管理は造園会社、市民との協働はNPO、事業評価や広報はコンサルタント会社というようなコンソーシアム体制が進められています。広い面積や危険が伴う作業は造園会社のプロが重機等を用いて行い、植物種を見極めてのきめ細かい作業は市民ボランティアが行うなど、連携しながら生物多様性の保全を進めています。



▲さまざまなボランティア団体が自主的に活動



▲コンソーシアムの構成

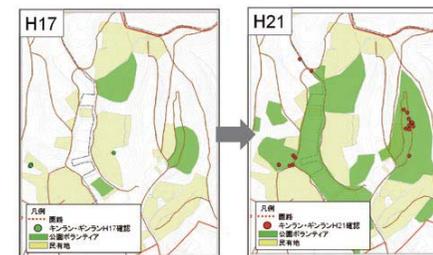


▲ボランティアと管理者とによるミーティング

## 4 GISを用いて保全の成果を明確化

各主体による保全活動の実績はGISに蓄積され、蓄積されたデータを活用して、保全の成果や今後の作業について検討を行っています。

一方、公園に寄せられた意見や要望はすべてデータベース化し、PDCA方式で、市民の意見を取り入れた公園運営に活かしています。



▲キンラン・ギンランの増加の様子がGISで明らかに

※写真・図版はすべて、西武・狭山丘陵パートナーズ 提供

### 【協働型パークマネジメント】

公園の利用者と管理者とが公園管理運営のありかたについて協議し協働するもので、イギリスやアメリカなどで多く実践されている。野山北・六道山公園では、「公園は都民が主役、管理者はサポーター」という考えのもと、新たな協働型パークマネジメントを目指している。

### 【GIS】

GIS(地理情報システム)とは、位置に関する様々な情報を持ったデータを加工・管理したり、地図の作成や高度な分析などを行うシステム技術の総称。複数のデータを地図上で重ね合わせ、視覚的に判読しやすい状態で表示できるため、分析結果の判断や管理もしやすくなる。

## 生物多様性でつなぐ“いきがづくり” 雪国越後の里山再生

フィールド 国営越後丘陵公園(新潟県長岡市)

タイムフレーム



### 1 雪国越後の里山再生に向けて

国営越後丘陵公園の里山フィールドミュージアムには、人の手によって管理されてきた二次林・人工林、水田、茅場として利用されてきたスキヤシの草地などから成る里山らしい多様な環境が、かつて存在していました。しかし、人の手によって管理がされなくなるとからは、水田のヨシ原化や、樹林の荒廃が進んでいました。

そこで、里山フィールドミュージアムを人と自然のかかわりを学び体験する場として、市民団体やボランティアと協働して里山の生態系に配慮した湿地環境の復元や樹林の管理等を行うことで、雪国越後の里山再生に取り組んでいます。



▲里山フィールドミュージアムの風景

### 2 公園をフィールドにしたNPO法人の誕生

越後丘陵公園の里山に関する検討会の委員の一部が核となり、平成17年に里山の再生や環境教育を行う「越の里山倶楽部」が設立されました。

平成18年にはNPO法人となり、里山フィールドミュージアムの景観を演出する水田・畑における無農薬・有機栽培での作物づくり、樹林や湿地での在来種保全作業、また、里山体験プログラムとして自然観察会や、昔ながらの郷土料理やわらぼうきづくり等を実施しています。



▲自然観察会(冬の里山散歩)

#### 【ホトケドジョウ】

水温が低く水草が繁茂した水路や湧水のある池などに生息する日本固有種。学名「Lefua echigonia」は基産地が長岡市付近だったことに由来する。水路のコンクリート化や農業による水質悪化等により減少しており、絶滅危惧IB種(全国)、絶滅危惧II類(新潟県)に指定されている。

#### 【温水田】

沢水等、温度の低い水をそのまま水田に引き入れると稲の生育に良くないため、一時的に水を溜めて水温を上げるための施設。低水温の地域でしばしば見られる。温水田の部分は年中湛水しており、クロサンショウウオやトノサマガエル等の貴重な産卵場となっている。

#### 【主な保全種】

ホトケドジョウ:絶滅危惧IB類(全国)、絶滅危惧II類(新潟県)  
クロサンショウウオ:準絶滅危惧(全国)  
トノサマガエル:絶滅危惧II類(新潟県) など



【目標設定】  
里山の  
原風景の再生



【担い手】  
NPO法人  
越の里山倶楽部

### 3 生物多様性に配慮した湿地管理

里山フィールドミュージアムの一角に復元した水田において、NPO法人越の里山倶楽部が主体となって、地元農家の指導のもと、その時期ごとの作業にご協力いただける方を一般募集しながら、生態系を重視した稲作管理を実施しています。無農薬・有機栽培はもちろん、中干しする際は、水生生物が一時避難できる窪地を水田内に設ける等の工夫を行っています。また、温水田の部分は年中湛水しており、クロサンショウウオやトノサマガエル等の貴重な産卵場となっています。

また、水田下流部の水路では、ホトケドジョウが生息することから、堆積しすぎた泥の掻き出し等を行っています。



▲温水田のクロサンショウウオ卵塊



▲地元の高校生と協力してのホトケドジョウが生息する水路の泥の掻き出し

### 4 里山の自然や文化を学ぶ

里山フィールドミュージアムでは、里山の大切さやその魅力を多くの来園者の方に伝えるため、様々な取り組みを実施しています。園内を散策しながら里山の多様な生き物を紹介する自然観察会をはじめ、古民家を拠点とした里山の恵みを体験する山菜料理やちまきづくりや、昔ながらの里山の暮らしに触れる田植えや稲刈り体験等のプログラムを来園者に提供しています。

また、NPO法人越の里山倶楽部では、里山の案内ガイドの養成を目的として、地域の生き物や文化の専門家を講師として招き、自然観察の方法や里山の魅力の伝え方等を楽しく学べる里山案内人講座も実施しています。



▲体験プログラム(山菜料理づくり)



▲里山案内人講座

#### 【特定非営利活動法人 越の里山倶楽部】

人と里山の良き関係づくりを目指して、「雪国越後の里山」の自然を守り育て、次代を担う子ども達に里山の魅力と大切さを伝えるために、様々な活動を展開している。

#### 【里山案内人講座】

里山の魅力を多くの来園者の方に理解し、感動してもらうために、里山の案内ガイドをする人の養成講座を開催している。地域の生き物や文化の専門家を講師として招き、里山フィールドミュージアムの自然を使って、自然観察の方法、里山の魅力の伝え方、里山の文化等を楽しく学べる講座としている。

# 生物多様性でつなぐ“環境教育” 港陽小学校の海苔づくり

フィールド お台場海浜公園（東京都港区）

タイムフレーム



## 1 専門家への相談からスタート

東京都港区台場は、昭和50年代に埋立され、人々が居住するようになって間もない若い町です。お台場学園はお台場唯一の学校で、小中一貫校として特色ある学校運営を心掛けており、お台場海浜公園の目の前に位置していることから、海を活かした環境学習ができないものかと考えていました。そこで港区環境課と相談し、海の生態系保全活動を行っているNPO法人海辺つくり研究会に相談をもちかけました。

東京湾は、かつては海苔養殖も盛んに行われていた土地柄です。海辺つくり研究会は「ここなら海苔がつかれるかもしれない」と考えました。



▲東京湾でのかつての海苔養殖 (大森 海苔のふるさと館 提供)

## 2 海苔づくりから全学年カリキュラム化へ

お台場学園港陽小学校での海の学習プログラムは、3年生を対象とした干潟の生物観察とアマモ育成からスタートしました。

平成17年から5年生を対象に海苔育成の環境学習がはじまりました。活動に継続性と関連性を持たせるために、全学年を通しての海辺の環境教育プログラムへと発展していきました。



▲お台場の海で環境学習

### 【お台場】

江戸末期、海防のため備えた砲台場がそのまま地名になった地域。13号埋立地の北西部にあたり、芝浦地区とは平成5年に開通したレインボーブリッジによって連絡している。海浜公園やアミューズメント施設などを有し、テレビ局の移転ともたない、華やかな観光スポットとして人気を集めている。

### 【海苔づくりの文化】

海苔養殖は、品川の徳川家への献上物に海苔がついているのを偶然見つけたことから、東京湾で養殖がはじまったと考えられている。江戸時代、幕府へ納めた海苔の量はおよそ9000リットルとされる。海苔の養殖は、戦後の高度成長により水質汚染や東京湾の埋め立て計画により、漁場環境は悪化の一途を辿り、昭和30年代に終焉を迎えた。

### 【主な保全種】

アサカサノリ:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN) など



【担い手】  
小学生による  
海苔づくり

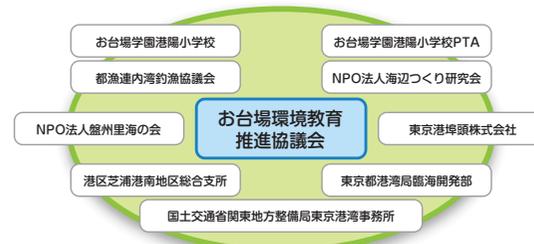


【合意形成】  
協議会の設置で  
活動がスムーズに

## 3 協議会の設置で活動がスムーズに

海辺を利用する活動は、多くの許認可申請の手続が必要です。海上保安庁、東京都防災管理事務所、東京都港湾局、東京都水産課、東京都漁業協同組合連合会、さらにウィンドサーフィンなどの利用者への周知も必要でした。

そこで、煩雑な許認可申請や事前の相談を効率的に行うために、平成17年、小学校・PTA・行政・NPO・漁協連・国土交通省などの団体による「お台場環境教育推進協議会」を設立し、各種手続・連絡・調整の効率化を図りました。



▲多様な主体によって構成されている協議会



▲4年生のアマモの観察



▲5年生の海苔の摘み取り

## 4 小学校の環境学習からふるさとづくりへ

同校の環境学習は、NPO団体などの専門家による外部支援から地域主体による継続的な生物多様性保全活動へと徐々に発展しつつあります。

港区では「お台場は、できて間もない街のため自治会もなく、住民同士の結びつきが希薄。この活動を地域住民の交流の場としていきたい」と、地域住民の結びつきを強化する仕組みへ発展させようと考えています。小学校で海苔づくりに取り組んだ思い出を持つ子どもたちにとって、お台場が「ふるさと」となるためには、生物多様性に富んだきれいな海であり続けることが大切です。



お台場の住民みんなが参加する収穫祭を開催 ▶

※写真・図版はすべて、お台場環境教育推進協議会 提供

### 【環境教育】

持続可能な社会の構築を目指して、家庭、学校、職場、地域その他のあらゆる場において、環境と社会、経済及び文化とのつながりその他環境の保全についての理解を深めるために行われる環境の保全に関する教育及び学習。小・中学校では平成13年にスタートした「総合的な学習の時間」等において取り組まれていた。

### 【特定非営利活動法人 海辺つくり研究会】

日本沿岸域の環境問題について、産官学民を問わず様々な経験、知識、技術を共有し、主に沿岸域環境の保全・再生・創出に関わる地球環境保全や地域振興活動を行う団体。調査研究・研究開発活動と行政と市民とのパートナーシップ構築のためのインタープリターとしての活動、人材育成・普及啓発活動などを行っている。

# 生物多様性でつなぐ“環境教育” テラス型干潟を用いた環境共生型護岸

フィールド 潮彩の渚（神奈川県横浜市）

タイムフレーム



## 1 干潟・浅場等の保全・再生・創出

平成13年12月に都市再生本部で決定された都市再生プロジェクト第3次決定の「海の再生」に基づき、平成15年3月に「東京湾再生のための行動計画」が策定され、各機関が環境改善の取組を進めているところです。

関東地方整備局では、「東京湾再生のための行動計画」を上位計画として、主体的に進めるべき取組の進むべき方向、連携・協働のあり方についての行動計画として、「東京湾水環境再生計画（案）」をとりまとめました。その取組みの一環として、老朽化した栈橋の撤去に併せて、その跡地と前面に1,000㎡規模の干潟・浅場（潮彩の渚）を造成しました。

潮彩の渚では、研究機関等との連携による環境改善効果の検証を行うとともに、NPO等との連携・協働による自然体験活動・環境学習活動の実践を通じた環境改善意識の醸成を図っています。

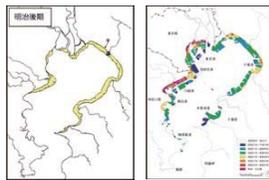


▲潮彩の渚全景

## 2 東京湾における浅場・干潟の遍歴

東京湾は、明治後期までは横浜から富津にかけて、連続して干潟・浅場が広がっており漁業も盛んに行われ豊かな生態系が形成されていました。しかし、昭和40年代から50年代にかけての大規模な埋立により、海岸線は護岸で仕切られることとなり、生物が生息するのに適した場が大幅に消失し、また市民が利用できる親水空間も減少してしまいました。

東京湾のこうした問題を解決するため、港湾施設と海の生物が共生できる海辺づくりの実現に向けての一步として、潮彩の渚は造成されました。



▲埋込立て地の遍歴  
(出典：関東地方整備局資料、平成19年度版首都圏白書)

### 【東京湾】

首都圏臨海部と房総半島、三浦半島に囲まれた、面積約1,380km<sup>2</sup>、容積約62.1km<sup>3</sup>の閉鎖性の内湾。横須賀市観音崎と富津市富津岬の間の湾狭狭窄部（幅約7km）を境に、内湾と外湾の二つの特性を有し、特に内湾においては外海との海水交換が制限された閉鎖性の強い海域となっている。

### 【干潟】

細かい砂や泥がある程度の面積で堆積しており、干出・水没を繰り返す場。干潟は内湾の奥や大きな河川の河口域によく発達し、東京湾に現存する代表的な自然干潟としては盤洲干潟、富津干潟、三番瀬、多摩川河口等がある。海水浄化・生物生息・生物生産・親水など多様な機能を持つ場として認識されている。

### 【主な保全種】

マルタ  
ウネナシトマガイ：準絶滅危惧(NT)  
コアジサシ：絶滅危惧Ⅱ類(VU) など



【担い手】  
官・民・学の  
協働



【モニタリング】  
生態系・  
環境改善の検証

## 3 官・民・学による調査

潮彩の渚の整備効果を検証するための調査は、公募より選定された市民団体「都市型干潟の賢い使い方研究チーム」や国土技術政策総合研究所等による官民協働体制によりスタートしました。「都市型干潟の賢い使い方研究チーム」は、様々な団体より構成されており、それぞれの機関と連携しながらの調査が行われています。

調査は、「誰でも出来る」をコンセプトに、専門的な知識や機材を有さず、市民でも行える簡便なものとなっています。一方で、官・学による学術的知見からの専門的調査とあわせ総合的に分析することで、より正確な現象の把握・解明が行われています。

### チームの推進体制

#### 都市型干潟の賢い使い方研究チーム

— 市民参加型組織による都市型干潟の賢い使い方研究する組織 —

賢い使い方研究チーム  
市民参加型組織による都市型干潟の賢い使い方研究を推進する役割担当

研究成果発信チーム  
賢い使い方研究チームの得られた成果を広く世の中に発信する役割担当

#### 構成メンバー

- 市民及び市民活動団体、海辺つくり研究会、海をつくる会、三番瀬市民センター、船山車海の会
- 研究機関：大学：東京大学磯部研究室
- 国・地方自治体：国土交通省国土技術政策総合研究所、神奈川県水産技術センター、神奈川県役所
- 小学校：幸ヶ谷小学校
- 企業：東京久米、東洋建設、東亜建設工業

定期的な会議を開催し情報の共有と実施に関する事項を調整

#### 連絡推進会議

— 実験が円滑にすすむよう実験チームをサポートする会議 —

#### 構成メンバー

- 国土交通省 関東地方整備局 港湾空港部
- 国土交通省 関東地方整備局 横浜湾空港技術調査事務所

## 4 順応的管理と協働調査

海辺の自然再生には、維持管理手法として順応的管理が不可欠です。順応的管理ではモニタリングが必要となります。これまで実施してきた市民団体との協働調査による結果は、モニタリングデータとしての活用に必要な可能性があることがわかりました。今後は、「誰でもできる」のコンセプトを踏まえ、楽しく出来る調査方法を開発するとともに、より簡便な手法を見いだす必要があります。

また、今後はより多くの方に、身近な自然の楽しさや豊かさを実感もらえるような仕組みづくり、調査などから得られた情報を幅広く周知するための情報公開の手法について検討されています。



▲環境学習



▲官民協働による生物調査

### 【東京湾再生のための行動計画】

中長期的な東京湾における水環境のあるべき姿を見据えて、①東京湾の水環境の現状、②東京湾再生に向けての湾全体の目標、重点エリアの設定、③その目標を達成するための陸域負荷削減策、海域における改善対策、モニタリング実施等の関連施策及びその計画的な推進についてまとめられている。

### 【順応的管理】

自然の環境変動により当初の計画では想定しなかった事態に陥ることや、歴史的な変化、地域的な特性や事業者の判断等により環境保全・再生の社会的背景が変動することをあらかじめ管理システムに組み込み、目標を設定し、計画がその目標を達成しているかをモニタリングにより検証しながら、その結果に合わせて、多様な主体との間の合意形成に基づいて柔軟に対応していく手段。

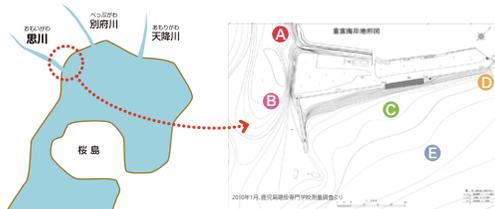
# 生物多様性でつなぐ“環境教育” 干潟の小さな博物館と自然観察プログラム

フィールド 重富干潟 (鹿児島県始良市)

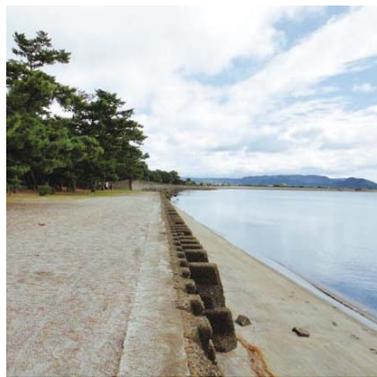


## 1 きっかけは地域の声

観察会や生物調査を行っていたNPO法人「くすの木自然館」は、干潟の生物が年々減少していることを危惧していました。「昔はアサリが沸くほど穫れた。あの頃の海にもどってほしい」という地元の人々の声を聞き、同じ地域の住民として自分たちができることはないかと、干潟と海岸の保全活動を開始しました。



▲重富干潟の位置図



▲重富干潟の風景

## 2 「ゴミゼロ運動」に子どもたちが参加

平成12年当時、海岸は汚くて危険な場所であり、子どもたちにとって「行ってはいけない場所」とされていました。地域住民から愛され、多くの利用者があつた美しい海岸を取り戻そうと、「くすの木自然館」は、毎日ゴミをすべて拾う「ゴミゼロ活動」を始めました。ゴミの量と内容を調べ、ゴミを減らす対策を行いました。海岸にゴミがなくなるだけで、危険性やマイナスイメージは払しょくされます。やがて、地域住民や子どもたちが、積極的にゴミ拾いに参加し始めました。



▲ゴミ拾いをする子どもたち

### 【重富干潟】

鹿児島湾奥の思川河口に位置する干潟。火口湖である鹿児島湾奥において、干潟は重富干潟と須崎干潟のみ。干潟の先は急に深くなり水深200mに達する。また、松林に囲まれ、白砂青松の景勝地としても地域の人々に愛されている。環境省「日本の湿地100選」に選定されている。

### 【重富干潟の生き物】

重富干潟は、干潟のできにくい火口湖にもかかわらず2河川により干潟を形成し、ゴカイやハクセンシオマネキなどの底生生物が数多く生息している。また、重富干潟を含む湾奥湿地一帯は、ミサゴ・クロツラヘラサギなどの野鳥の楽園となっており、「鹿児島県のすぐれた自然」にも選定されている。

### 【主な保全種】

クロツラヘラサギ: 絶滅危惧ⅠA類(CR)   ゴカイ など  
ミサゴ: 準絶滅危惧(NT)  
ハクセンシオマネキ: 絶滅危惧Ⅱ類(VU)



【モニタリング】  
専門機関と連携、  
毎日定点観測

## 3 重富干潟の日本一小さな博物館

平成17年、行政・漁協・地域住民・大学・地元小中学校・専門学校・NPOによるシンポジウムが開催され、「干潟のことを知ってもらふ施設が必要」という意見が出され、その活動拠点を重富海岸につくることとなりました。

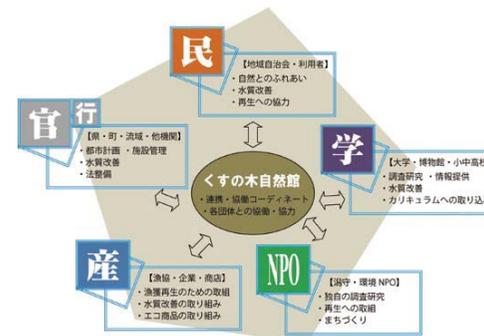
「重富干潟小さな博物館」は、始良町(現・始良市)所有の「海の家」を活用してつくられました。展示内容は鹿児島大学の先生の監修を受け、内装等は地域住民と協働で手づくりによるものとなっています。活動の柱は、常駐インタープリターによる展示の説明、観察会を行なう環境教育活動、干潟の定点観測を行なう調査研究活動等となっています。



▲重富干潟小さな博物館

## 4 「重富の海のコンソーシアム」

シンポジウムをきっかけに「皆で同じ方向を向き、連携して協力しないといけない」という思いが一致し、「重富の海のコンソーシアム」が立ち上がりました。干潟再生の活動を、各主体が連携して行うことで、効果を倍増させるような仕組みづくりが進められています。「重富干潟小さな博物館」を拠点に、地域の小中学校では総合学習の時間や遠足に干潟を利用、大学は生態系調査に協力、地元の企業はエコ商品開発や資金面でのサポート、漁協や行政もそれぞれの立場で積極的に関わっています。産・官・民・学・NPOが手をとりあつて、重富干潟と地域の再生をすすめています。



▲コンソーシアムの概念図

※写真・図版はすべて、特定非営利活動法人くすの木自然館 提供

### 【重富干潟小さな博物館】

1990年代から重富干潟で生物調査を行っている「くすの木自然館」が、平成17年に町有の海の家を借りて開館。調査研究活動と環境教育普及活動を行っている。観覧無料の常設展示のほか、自然観察会やワークショップ、出張講義なども行っている。

### 【特定非営利活動法人 くすの木自然館】

「かこしま自然観察会」(昭和62年設立)を母体として、有志の環境教育指導者達で、平成7年「くすの木自然館」を設立。平成12年にNPO法人となる。重富干潟に常時対応できる環境教育拠点を置き、保全活動等を行なっている。平成17年MBC賞(南日本放送)、平成18年鹿児島県民表彰、平成23年鹿児島県景観表彰受賞。

# 生物多様性でつなぐ“防災” 全住民で流域治水に取り組み水循環を再生

フィールド 樋井川(福岡県福岡市)

タイムフレーム



## 1 ゲリラ豪雨による浸水被害をきっかけに「樋井川流域治水市民会議」発足

近年福岡市では、1時間90mm超の雨が毎年観測されており、また都市化により、水害の発生リスクは高くなっていました。平成21年7月、1時間に91mmというゲリラ豪雨が発生、樋井川は氾濫し、約28.5haが浸水被害を受けました。同年10月「樋井川流域治水市民会議」が開催され、流域市民と行政・研究者などが一堂に会し、これからの樋井川の治水対策について話し合いが始まりました。



▲「樋井川流域治水市民会議」の様子  
(樋井川流域治水市民会議 提供)

## 2 全住民・全関係主体が協働で取り組む流域治水の推進

市民会議は、第1回から現在まで毎月開催、平成22年1月には、それまでの地元住民・市民団体・研究者・行政による話し合いの成果をまとめ、福岡市長に「樋井川流域治水に関する市民提言」を提出しました。

流域治水の主な対策は、河川への雨水の流出量が大雨時に急激に増加するのを抑えるため、さまざまな主体が協力して、雨水貯留や浸透を図ることです。福岡市では、公民館や学校など公共施設での雨水貯留浸透を図るほか、住宅に雨水貯留タンクや浸透枳を設置する際に、補助金を出しています。

### 樋井川流域治水に関する市民提言

1. 全住民、全関係主体が協働で行う流域治水の推進
2. 治水と環境・福祉・教育を切り離さない考え方の共有
3. 2009年7月洪水に対応する緊急対策
4. 流出抑制による流域対策
5. 総合的な対策を行うための仕組みの構築・強化と実行
6. 啓発・教育
7. 研究・技術開発
8. 樋井川流域から他流域へ

▲樋井川流域治水に関する市民提言

### 【樋井川】

樋井川は油山に源を発し、福岡市南区、城南区、中央区、早良区の境を流れて博多湾へ注ぐ二級河川。流域のほとんどが住宅地で、福岡市の中でもかなり人口の多いところを流れている。アユやシロウオが溯上・産卵し、サギやカワセミなどの野鳥も多く見られる生命豊かな川である。また、流域ではボランティア団体などによる清掃活動やレクリエーションがさかんに行われている。

### 【都市型水害】

都市では、道路が整備されて側溝がつくられ、住宅には雨どいがつくられ、できるだけ早く川に雨水を流す構造となっている。降った雨が川に到達する時間は飛躍的に短縮された結果、短時間に大量の雨が降ると洪水が起きる。ヒートアイランド現象などによって起きる都市部の集中豪雨などによって、発生する。

### 【主な保全種】

ヘイケボタル・ゲンジボタル  
アユ  
シロウオ:絶滅危惧Ⅱ類(VU) など



### 【担い手】

全住民・全関係主体による  
取り組み

## 3 雨水貯留による水循環の再生で、治水と環境保全との両立

提言では、「流域の全住民・全関係主体が協働で取り組むこと」と、「治水と環境・福祉・教育を切り離さない考え方」が明確に示されました。「治水=行政が行うもの」という認識を改め、上流と下流の人と人の関わりを回復し、各家庭で雨水貯留することで下流の被害を減らす、水を汚さない努力など、流域意識が芽生えてきました。その結果、水害を防ぐだけでなく、アユやシロウオなどが遡上する清流を保全し、地域に愛される川づくりを目指すようになりました。



▲家庭に設置された雨水貯留タンク  
(特定非営利活動法人 南畑ダム貯水する会 提供)

## 4 樋井川を中心にさまざまな市民活動が活発化

樋井川では、城南区が主催したまちづくりワークショップに集った市民有志で結成された「樋井川を楽しむ会」や、樋井川および博多湾の環境再生を目指して清掃活動や環境調査、環境学習を開催している「はかたわん海援隊」など、多くの市民活動が活発に行われています。市民会議は、これらの多様な活動生体と連携し、治水だけでなく、樋井川流域全体の環境を保全し、ふるさとの川づくり、まちづくりへとつなげています。



▲地元小学生を対象とした環境学習  
(はかたわん海援隊 提供)

### 【「樋井川流域治水市民会議」】

「樋井川に関心を持つすべての市民が、流域の過去に学び、行動し、未来に対して希望を持つために、情報を共有して平等な話し合いをする場を創出すること」を目的として結成された市民の会。毎月のように開催する市民会議のほか、勉強会、フィールドワークなど、他の市民団体と連携して行っている。

### 【行政による治水対策】

福岡市では、下水道整備で雨水排水を効率化を進めるほか、公共施設の雨水流出抑制指針を策定し、透水性舗装、浸透ますの設置、調整池の整備などを進めている。また、家庭で雨水貯留タンク設置の際に補助金を出すなどの支援も行っている。

# 生物多様性でつなぐ“防災” 氾濫原再生で治水と自然再生を両立

フィールド アザメの瀬 (佐賀県唐津市)

タイムフレーム



## 1 検討会でみんなの思いを醸成

松浦川のアザメの瀬地区は、毎年のように洪水被害を受けるため堤防や遊水地などさまざまな治水対策が検討されてきました。一方、松浦川の流域全体では、治水対策によって氾濫原が減り、ドジョウやナマズなど氾濫原湿地に依存する生き物が減少しています。

このような中、平成11年に地域住民と行政、専門家などで構成される「アザメの瀬検討会」が発足し、シンポジウムや勉強会が行われるようになりました。その結果、「松浦川を昔のきれいな川に」「子どもが遊べる環境に」「魚がいっぱいいる川に」という市民の思いが醸成されていきました。

同会が2年間で20回超の検討会を積み重ねた結果、国がアザメの瀬の全面積約6haを買い取り、氾濫を許容し下流への洪水被害を減らす方法をとることとなりました。



▲誰でも参加できる「アザメの瀬検討会」

## 2 自然再生だけでなく人と生きもののふれあいも再生

検討会を通じて次のような目標が設定されました。

- ①川とつながった湿地環境を再生
- ②普通に見られる生物を保護対象にする
- ③暮らしの視点で共生を考える
- ④子どもたちが生き物と触れ合える場の再生
- ⑤美しい自然風景の再生
- ⑥洪水の氾濫を認め下流への洪水抑制も念頭に置く
- ⑦やりなおしのきく順応的な整備方式をとる
- ⑧地場材を使い刈草なども持ち出す堆肥利用(循環)
- ⑨徹底した市民参加



▲基本構想図

### 【アザメの瀬】

松浦川中流部に位置する、面積約6.0ha、延長約1,000m、幅約400mの区域の名称。「アザメの花が咲いている場所」というのが名前の由来といわれている。

### 【氾濫原の生態系】

氾濫原とは河川下流部に広がる低地のことで、河川の氾濫の影響を常に受ける湿地のこと。日本では古来、氾濫原は水田として利用されてきた。多くの氾濫原に依存する生物は水田および水路、ため池などを生活の場とし、水田生態系として維持されてきた。氾濫原生態系の特徴は、雨期に水、土砂、栄養塩、有機物、生物などが河川から移動、拡散することによって成り立っていることである。

### 【主な保全種】

ドジョウ、メダカ：絶滅危惧Ⅱ類(VU)      コイムシ：準絶滅危惧(NT)  
ヤリタナゴ、カワヒガイ：準絶滅危惧(NT)      ベニイトトンボ：絶滅危惧Ⅱ類(VU) など  
オオアブノメ、ミスズババ：絶滅危惧Ⅱ類(VU)



### 【合意形成】

みんなで考え  
みんなで決める  
検討会



### 【モニタリング】

情報発信と  
調査研究を  
保全に活かす

## 3 情報発信と調査研究を保全に活かす仕組み

徹底した市民参加で自然再生を進めるために、同会では話し合われた内容を伝える「アザメ新聞」を発行しています。また、アザメの瀬整備工事期間中は、生物調査や中間モニタリングを行ない、その結果を公表しています。さらに、第三者評価の試みとしてアザメの瀬に関する研究を公募し、研究成果を事業に活かす学術的な取り組みが行われています。

地層調査で採取した土の埋土種子を用いて発芽調査を行なった結果、37種が発芽し、絶滅危惧種シャジクモも確認されました。そこで、土壌シードバンクによる植生回復の取り組みも始まりました。



▲市民と研究者の協働によるシードバンク調査

## 4 アザメの会と相知小学校の環境学習

平成14年、アザメの瀬の自然再生事業をバックアップする住民組織「アザメの会」が新たに発足しました。秋にため池の水を抜いて魚をつかまえる「堤返し」や「イダ嵐」(春一番に産卵にやってくるウグイの群のこ)の釣り大会などを企画し、子どもたちに伝統漁業や自然体験に伝える活動をしています。

アザメの瀬に近い相知(あいち)小学校では、アザメの瀬内に棚田をつくり、田植え、草取り、稲刈りまで行う「田んぼの学校」という環境学習を実施しています。



▲子どもたちの稲刈り

### 【土壌シードバンク】

土壌に含まれる休眠中あるいは休止状態にある生きた種子の集合のことで、種子の貯蔵庫という意味からシードバンクと呼ばれる。これらの種子は、発芽に適した条件がそろったり、高温や温度変化などの刺激を与えられることによって発芽する。

### 【アザメの瀬の棚田】

アザメの瀬に造成された水田。湿地整備前の水田を部分的に復元したもので、アザメの瀬の核となる施設である。伝統的な山景観を創出するとともに、農耕作業を体験することによって、自然との係わりを学習する場でもある。

# 生物多様性でつなぐ“防災” 高潮対策と干潟保全を実現したセットバック護岸

フィールド 中津干潟（大分県中津市）

タイムフレーム



## 1 カブトガニ発見！この感動を伝えたい

中津干潟は、子どもたちが浜遠足で訪れ、地域住民が「夕飯のおかずを取りに来る」ような市民に親しまれた場所でした。高度経済成長期以降、市民と海との距離は遠のいてしまい、浜辺にはゴミが捨てられ、汚くて危ない場所と言われるようになりました。

このような中、NPO法人水辺に遊ぶ会が干潟調査を行ったところ、地域住民が干潟に足を踏み入れたところ、多様な生物が息息しており、絶滅危惧種のカブトガニの生息も確認されました。「この感動をみんなに伝えたい」という気持ちが活動の原動力になりました。



▲カブトガニ



▲市民の手による生きものマップ

## 2 観察会と情報発信で干潟ファンを増やす

平成11年以降、中津干潟をフィールドに同会による定期的に観察会が開催されるようになり、子どもたちに干潟体験が提供されるようになりました。始めは恐る恐るの子どもたちは、泥の中に生物を発見し、歓声をあげます。また、生物調査、漂着ゴミ調査、海と浜の郷土史調査なども行われ、これらの成果を活用し、中津市の小中学校や高校で、中津干潟についての環境学習が行なわれるようになりました。同会では、インターネット上の仮想博物館による情報提供や、年4回の機関誌発行、調査レポートなど、中津干潟に関する情報発信も行っています。



▲干潟観察会

### 【中津干潟】

大分県と福岡県の県境に位置する日本有数の広大な干潟で、耶馬日田英彦山国定公園より流れる山国川により形成されている。砂質、砂泥質、泥質、礫質の干潟、塩性湿地、砂洲、砂浜などが生み出す多様な環境下で、カブトガニ、アオギス、ナメクジウオ、ハマグリ、スグロカモメなどの希少種が確認されている。

### 【カブトガニ】

2億年前から昔の形のままで、生きている化石といわれる。大分県上は節足動物で、クモの仲間にも近い。現在、世界に分布するカブトガニは2属4種で、日本には1種が生息している。瀬戸内海一帯と北九州の一部に分布しているが、その数は年々減少している。内湾性の動物で、波の穏やかな浅海に広大な干潟と砂浜を有していることが、生息の条件。

### 【主な保全種】

カブトガニ：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN) ハクセンシオマネキ：絶滅危惧Ⅱ類(VU) など  
アオギス：絶滅危惧ⅠA類(CR)  
スグロカモメ：絶滅危惧Ⅱ類(VU)



【モニタリング】  
市民の  
生きもの調査を  
保全に役立てる

## 3 地元の漁師と子どもたちとのふれあい

郷土史調査の課程で、中津干潟では古墳時代からイタダコのとぼ漁が行われていたことを知りました。そこで、子どもたちと自作タコつぼを使ってのタコつぼ漁体験を行いました。これをキッカケに、海苔漕ぎ体験や囲い刺し網漁など、地元漁業者の協力で子どもたちの漁業体験が始まりました。

また、枝のついたマダケを使う伝統漁法の「ササビビ」が、40年ぶりに再現されました。マダケ12000本は市民が伐り出し、マダケの海への建て込みは漁業者が、効果のモニタリングは行政が中心となって行うなど、市民・漁業者・行政が協力して取り組んでいます。

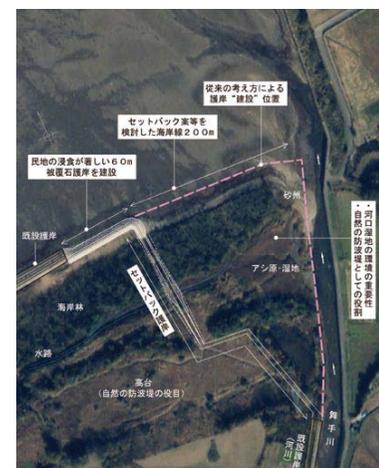


▲子どもたちのタコつぼ漁体験

## 4 市民の生きもの調査がセットバック護岸の実現につながった

平成11年に中津港が重要港湾に指定されたことから、市民・地権者・漁業者・学識者・行政等による懇談会が開催され、中津港周辺整備事業についての検討が行われました。平成17年には、この会を引き継ぎ形で「大新田地区(舞手川河口付近)環境整備協議会」が発足しました。

同協議会の5年間の協議の結果、高潮対策の護岸を海岸線から約120mセットバックして設置し、河口干潟の環境を保全するセットバック護岸が実現することとなりました。これは、市民による調査に基づく提案書と研究者による裏付け、行政や地権者等との協議と協力の賜物です。



▲舞手川河口のセットバック護岸

※写真・図版はすべて、水辺に遊ぶ会MUSEUM 提供

### 【干潟での漁業とササビビ】

中津では広大な干潟を利用して採貝漁業やノリ養殖が盛んに行われてきたが、近年は衰退傾向にある。ササビビは昭和40年頃まで行われていた定置網の一種で、干潟にV字型に生け垣のように枝のついたマダケを設置する。渦流や消波作用による二枚貝類の沈着に効果があり、生物の隠れ家ともなる。また、竹を利用する事から里山の竹林整備にもつながる。

### 【特定非営利活動法人 水辺に遊ぶ会】

平成11年、任意団体として設立。観察会や干潟の調査研究、海岸清掃、体験漁業などを行なっている。この団体の活動によって中津干潟の豊かな生物相について知られるようになった。「中津港大新田地区環境整備懇談会」では、事務局をつとめ、地域住民と専門家らによる合意形成のもとに舞手川河口のセットバック護岸を実現している。

# 生物多様性でつなぐ“なりわい” グラウンドワーク方式で河口干潟を再生

フィールド 鶴川[むかわ] (北海道勇払郡むかわ町)

タイムフレーム



## 1 シシャモの川・鶴川の危機

鶴川(むかわ)は、北海道でもトップクラスの清流として知られシシャモなど豊かな水産資源に恵まれ、アイヌの人々に「母なる川=女川(ポン・ムカ)」と呼ばれた川です。海流と川の土砂の微妙なバランスによって、河口に砂嘴(さし)や干潟が形成され、多様な生物を育ててきました。

しかし、川からの土砂の供給が少なくなったうえに、海岸線の構築物等によって海流が変化し、砂嘴が小さくなり海岸線が大きく後退し、干潟の約90%が失われました。そこで、平成8年に行政と市民団体・漁業団体等による河口懇談会が開催され、多様な主体による話し合いがスタートしました。



▲河口干潟の浸食状況

## 2 グラウンドワーク方式で干潟を再生

河口懇談会により、海岸保全を実施する方向性が示されました。市民団体有志より「渡鳥が飛来する干潟の復元」の要望書が出され、干潟造成が実施されることとなりました。

懇談会の参加有志によって新たに設立された市民団体「わくわくワークむかわ」と行政と話し合うグラウンドワーク方式で、平成13年、干潟試験地を造成して工法や効果を検証し、平成15年、これを拡幅して2.7haの干潟を造成しました。また、漁港で浚渫した土砂を河口左岸に運び砂嘴を保全する方策も実施されています。



▲鶴川と海との間の砂嘴

### 【鶴川の河口干潟】

北海道で5番目の長さをもつ鶴川は、その名が「ふさがる川」に由来するように、河口に砂がたまりやすい。干潟とその周辺は渡り鳥であるシギ・チドリ類の重要な中継地となっており、鳥獣保護区に指定されている。春5月と8～9月に多くの渡り鳥が飛来しており、これまで50種類近くものシギ・チドリ類が記録されている。

### 【シシャモ】

世界中で北海道太平洋沿岸の一部でしか獲れない魚で、アイヌ語のスス(柳)ハム(葉)が転じて「シシャモ」となったとされる。飢えに苦しんでいた人々を神様が川に落ちた柳の葉を魚に変えて助けたというアイヌの伝説がある。晩秋に産卵のため鶴川を溯上する。むかわ町の町魚。

### 【主な保全種】

シシャモ: 絶滅の恐れのある地域個体群(LP) マガン: 準絶滅危惧(NT)  
オジロワシ: 絶滅危惧ⅠB類(EN) アカアシシギ: 絶滅危惧Ⅱ類(VU) など  
オオワシ: 絶滅危惧Ⅱ類(VU)



### 【合意形成】

グラウンドワーク方式で多様な主体が連携

## 3 自然再生は気長に地道に 息の長い活動を目指す

干潟の造成にあたっては、ゴカイなどの底生生物の出現状況の調査や、海水や浮遊物の交換をよくするために溝を設けるなど試験地で得た知見を踏まえ、研究者や市民との話し合いが重ねられました。また、河口右岸に水制工(護岸等を守るため、川の流れを調整する施設)設置や、干潟内の水路拡幅など、改良が重ねられました。

現在、干潟の陸化が進み、水草類の繁茂による水質悪化が課題となっています。活動する市民団体のメンバーは、「人間が自然に手を加えたら手間がかかってあたりまえ。地道に活動を続けることが大切」と、水草類の刈り取り作業を続けています。



▲官民共同での除草作業  
(ネイチャー研究会 in むかわ 提供)

## 4 まちの自然と文化を子どもたちに伝えたい「田園教育力」の再生へ

平成11年から「鶴川・沙流川(さるがわ)かわ塾」が毎年実施されています。子どもたちに水難事故を防ぐための正しい知識と危険回避能力を身につけさせることと、ふるさとの川で自然に触れ合いながら遊ぶ楽しさを味わってもらうため、ライフセイビングやカヌー教室、生きもの観察会などが行われています。

また、平成17年には鶴川の自然や文化を守り伝えるため、行政と市民団体等による「むかわ町田園教育力再生協議会」が設立されました。同協議会では「鶴川柳葉魚(ししゃも)浜まつり」の実施や、「ふるさと小径」の整備などを行い、シシャモに代表されるむかわ町の自然や文化を伝える活動を展開しています。



▲干潟での鳥の観察(「干潟へ楽しいピクニック」)  
(ネイチャー研究会 in むかわ 提供)

### 【グラウンドワーク】

1980年代初頭に国内の地域社会の衰退を背景に設立された組織。「住民・企業・行政がパートナーシップを組み、地域環境の改善を通して経済および社会の再生を図り、持続可能な地域社会を構築すること」を目的としている。鶴川では、河口懇談会から発展した「わくわくワークむかわ」が専門組織の役割を果たし、行政や地元産業と連携して取り組んできた。

### 【むかわ町田園教育力再生協議会】

むかわの自然や文化を守り、後世に伝える活動団体として、町内の官民6団体が設立。町魚シシャモの文化を伝える「鶴川柳葉魚浜まつり」の開催や、再生した干潟を見学するコースなど4つのフットパス(遊歩道)を整備し案内板等を設置する「ふるさと小径」事業などを進めている。

# 生物多様性でつなぐ“なりわい” よく利用されかつ美しい川を目指す

フィールド 矢作川(愛知県豊田市・岡崎市・安城市・西尾市・碧南市)

タイムフレーム



## 1 泳げる川を目指して

矢作川は、本川に7つのダムが建設され、農業用水・工業用水・上水・発電等に年間約5億トンが取水される結果、人為的に水量が減ってしまっている川です。高度経済成長期、窯業、工業、土地の開発、生活排水により、水質が著しく悪化しました。

このような中、漁業団体や市民は水質汚濁の解消に乗り出しました。「泳げる川を返せ 矢作川水泳大会」(昭和40年代)、「月刊矢作川」の創刊(昭和52年)「矢作川筏下り」(昭和60年～)、など市民の川再生の機運が高まりました。市立西広瀬小学校では、35年間にわたり毎日水質調査を行っています。



▲現在の矢作川



▲毎日同じ時刻、同じ場所で取水し検査  
(豊田市西広瀬小学校 提供)

## 2 護岸を近自然改修し、市民が水辺公園を管理

平成2年、愛知県・豊田市・農業団体・漁業団体・市民団体・研究者・建設省等による「豊田市矢作川環境整備計画検討委員会」が発足し、4年間の討議を経て、環境に配慮した川づくりが決定されました。

また、スイス・ドイツへの視察も行われ、近自然河川工法による護岸整備が実施されました。整備した河岸周辺は、市民が「古巣(ふっそ)水辺公園愛護会」を結成して、ゴミ拾いや下草刈り、河畔林管理などの保全活動が行われています。



公園愛護会のみなさん  
(豊田市矢作川研究所 提供)

### 【矢作川】

長野・岐阜・愛知の3県を流れ、三河湾に注ぐ一級河川。源流部から河口まで約1900mの標高差があるため、流域には亜寒帯性の針葉樹林、温帯性の落葉広葉樹林、暖帯性の常緑広葉樹林など、多様な植生が存在している。流域人口は、約112万人。中～下流部は一大農業・工業地帯であり、農業・工業・上水道用水と電力を供給するため、7つのダムが建設されている。

### 【アユ】

キュウリウオ科アユ属。北海道中部以南に分布し、国外では、韓国、中国、台湾等の沿岸に分布する。琵琶湖に陸封されたアユは、最近のmtDNA分析等により川と海を行き来するアユとは遺伝子型が異なる事が解っている。海水温と川の水温が大体同じになる春先に海から川に遡上する。最近の調査では、海に下らず、河口域周辺で育つアユも発見されている。

### 【主な保全種】

ネコギギ: 絶滅危惧IB類(EN)  
キイロヤマトンボ: 準絶滅危惧(NT)  
アユカケ: 絶滅危惧II類(VU) アユ など



【担い手】  
産官民の協働



【モニタリング】  
流域の  
研究データを蓄積

## 3 市・漁協・市民の協働で天然アユの復活へ

平成6年になると、市・漁協・市民の協働により「豊田市矢作川研究所」、市民による「矢作川天然アユ調査会」が同時に発足することとなりました。

研究所と市民との研究の結果、矢作川と三河湾の天然アユの生態が解明され、そのデータを基に国や県と協力して上流のダムの運用、魚道の改良、産卵場の造成、稚アユ・親アユの輸送作戦が開始されました。将来にわたって天然アユがたくさん釣れる矢作川を目指しています。



▲明治頭首工の改良魚道を大量遡上するアユ  
(豊田市矢作川研究所 提供)

## 4 産官学民の緩やかな連携を目指して「矢作川宣言」

平成13年、市・漁協・市民団体等は第1回矢作川川会議を開催し、「矢作川宣言」を採択しました。源流の森の整備や河川環境に配慮したダム運用、川の文化を継承する人材を育てる「矢作川学校」の開設など、産・官・学・民の緩やかな連携で実現していくことを目指しています。

また、平成15年には、矢作川漁業協同組合は、創立100周年を記念して「環境漁協宣言」を採択し、行政や市民団体と協働して「矢作川天然アユ保全の16項目の対策」を進めています。



▲漁協と市民団体とで協力してオオカナダモを駆除  
(NPO法人矢作川森林塾 提供)

### 【近自然河川工法】

コンクリートを主に用いて改修された河川を、もう一度自然の川に近い形につくり直そうと、1980年代からドイツ、スイスを中心に高まった川づくりの工法。川の生物や植物に配慮し、土、石、樹木等の自然材料を多用し、瀬や淵など河床や流路の多様性を尊重するところに特徴がある。矢作川の水制工は、わが国の先見的な事例で、ヨーロッパの近自然工法を背景に地元高齢者の意見を聞いてつくられた。

### 【矢作川川会議】

豊田市制50周年、矢作川漁協創立100周年、古岸水辺公園着工10周年、矢作川筏下り大会15周年を記念し、第1回矢作川川会議を開催。実行委員会は行政を含め16団体で構成されている。豊田市外の団体とも積極的に交流し、平成17年には「第8回「川の日」ワークショップin矢作川」を開催、全国から600人の参加者を集めた。

# 生物多様性でつなぐ“観光振興” サクラをまちのシンボルに

フィールド 弘川寺歴史と文化の森 (大阪府南河内郡河南町)



タイムフレーム



## 1 西行の終焉の地・弘川寺のヤマザクラとササユリを保全

弘川寺は、西行法師終焉の地でヤマザクラが自生しササユリが確認されている里山でした。平成11年、大阪府は弘川寺周辺の府有林内に遊歩道・トイレ・ベンチを整備しました。平成14年、「森を保全したい」というNPO法人里山倶楽部による要望を受け、弘川寺周辺の森林の保全整備のために、大阪府・河南町・森林組合・河内小学校・地元自治会などによる「弘川寺歴史と文化の森ふれあい推進協議会」が結成されました。



▲サクラの季節の弘川寺歴史と文化の森

## 2 河内小学校の学校林プログラム

協議会のできた年に地元の河内小学校6年生による卒業記念植樹が行われました。これがキッカケとなり、弘川寺の森における学校林活動が始まりました。同校では、3年生による環境学習や炭焼き体験、4年生による竹林の整備、5年生による学校林の中に田んぼを開拓、6年生による間伐作業というように、子どもの体力に応じて森での環境学習がカリキュラム化されています。この環境学習は、里山倶楽部がプログラムの企画運営を行い、協議会を通して地元自治会・行政等に支えられています。



▲学校林における環境教育活動

### 【弘川寺歴史と文化の森】

大阪府南河内郡河南町の弘川寺周辺の森約68haを大阪府が所管、河南町が管理している。弘川寺は、西行法師終焉の地として知られる。約1500本のサクラが植えられており、「河内名所図会」にも登場する名木「隅屋桜」があり、サクラの名所として知られている。平成13年から「弘川寺桜まつり」が開催されている。

### 【ササユリ】

本州の中部以西に生育し、6月から7月にかけて開花する。花は淡いピンク色で、香りもよく、姿も可憐なため人気がある。本来、ササユリは人が住む集落近くの里山に自生し、人の手が入ることにより守り育てられてきた里山の植物である。

### 【主な保全種】

ヤマザクラ・ササユリ など



【目標設定】  
サクラの町として  
ブランド化



【担い手】  
アドプトフォレスト制度で  
企業の参加

## 3 大阪府アドプトフォレスト制度で企業も参加

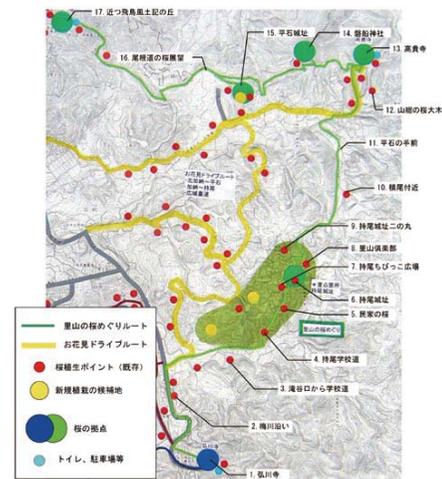
平成20年、株式会社近鉄百貨店と大阪府はアドプトフォレスト協定を締結しました。平成21年にはギャラリー「月夜と少年」、平成22年には三洋商事株式会社とも締結、弘川寺の森づくり活動に企業が参加することとなりました。企業にとっては、里山体験によって従業員の心身の健康を促進し、地元へのボランティア活動によって地域貢献することができ、さらに企業活動で出したCO<sub>2</sub>を森の吸収するCO<sub>2</sub>で相殺することができます。



▲企業によるアドプトフォレスト活動

## 4 かなん桜プロジェクト

弘川寺では、毎年「桜まつり」を開催するようになり、河南町は桜の町として住民に意識されるようになりました。河南町では、市民と協働して里山に自生するヤマザクラを保全するほか、桜にちなんだ商品開発などを行うまちづくり計画「かなん桜プロジェクト」を策定し、行政・市民・学校・専門家等による協働のまちづくりへとつなげています。



【かなん桜プロジェクト】の  
観光ルート計画図▶

※写真・図版および情報はすべて、特定非営利活動法人里山倶楽部 提供

### 【かなん桜プロジェクト】

河南町の里山に自生するヤマザクラを地域資源として保全活用し、河南町の魅力を活かしたまちづくりを、住民参加で行う地域活性化プロジェクト。サクラ植生地調査を行ない、町内に重点整備地区を設定して整備することを計画している。

### 【特定非営利活動法人 里山倶楽部】

里山の保全・管理・環境教育・人材育成などを行う市民団体。平成元年に設立された前身団体「南河内水と緑の会」から平成7年に独立。里山ボランティア活動のほか、里山源流米や無農薬野菜、炭等の生産販売、地場産品の市を開催するなど、地元に着した活動を続けている。

フィールド 一の坂川（山口県山口市）

タイムフレーム

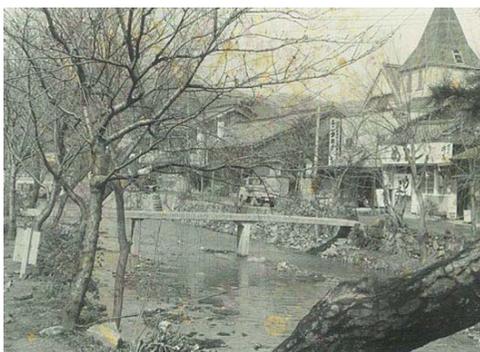


## 1 ゲンジボタルの復活を目指し「ホテル護岸」を実現

一の坂川は、「ゲンジボタル発生地」として国の天然記念物に指定されているホテルの名所です。

戦後、農業や生活排水等の水質汚染によりホテルの発生数は減少しました。それを受け県の農業試験場では、ホテルの保護増殖の研究を進めていき、昭和43年には、屋外での繁殖実験にこぎつけ、ホテルの放流を始めました。

このような中、昭和46年の台風19号で甚大な溢水被害を受け、河川改修を本格的に実施することとなり、行政と市民が一丸となってホテルの復活を目指したホテル護岸を完成させました。



▲昭和38年頃の一の坂川（小山哲彦氏 提供）

## 2 画期的なホテル護岸の実現

ホテル護岸を実施した一の坂川の特徴は、「治水」機能だけでなく、当時（昭和48年）としては先進的な「生物（ホテル）」、「景観」にも配慮したことです。ホテル護岸の実施に際しては、当時ホテルを研究していた農業試験場の専門員のアドバイスを受け、流速、構造、植栽などホテルの生息環境に適した川づくりを実施しました。また、歴史的な景観を有した一の坂川周辺の町並みにあわせ、護岸を石積みで施工しました。

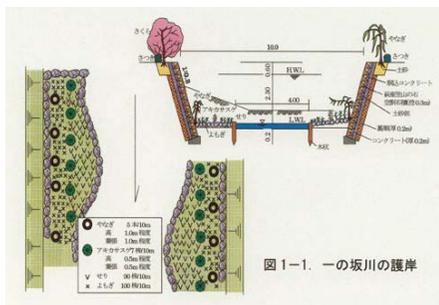


図1-1. 一の坂川の護岸

▲ホテル護岸の図（山口県河川課 提供）

### 【一の坂川】

一の坂川は流域面積10.5km<sup>2</sup>、流路延長5.3kmと比較的小規模な河川。一の坂川は古く室町時代に大内氏が京の都を流れる鴨川に見立てて町割りを行ったといわれており、歴史的由緒のある河川である。

### 【ゲンジボタル】

コウチュウ目ホテル科。5月～6月頃、交尾のため、雌雄とも発光する。山口市は全国第2位のゲンジボタル発生地（平成20年全国ホテル研究会調査による）。一の坂川では毎年成虫を捕獲し、産卵したものを、一の坂川で捕獲したカワコナで飼育している。

### 【主な保全種】

ゲンジボタル発生地（国・天然記念物）など



【目標設定】  
ホテルに  
目標をしぼる



【担い手】  
子どもたちの  
保全活動を地域で支援

## 3 大殿小・中学校によるホテルの保全

昭和62年からは、地元の大殿小学校の児童によるホテルの飼育と放流が始まりました。秋に幼虫が放流され、幼虫が十分成長した11月中旬ごろには、同じく地元の大殿中学校の生徒による草刈りが行われます。ホテルの飼育小屋には、ホテルの生育にちょうどよい湿度と温度を自然に保つことができる酒蔵（国の登録文化財）が利用されることとなりました。



▲子どもたちが育てた幼虫を放流（岡田勝栄氏 提供）

## 4 「川は住む人の顔」ホテル舞うきれいな川を町ぐるみで守る

ホテルの復活運動は、住民の間に「川は住む人の顔」という意識を高め、ホテルのいる川を守りきれいに保つことを誇りに思う気持ちを醸成しました。平成3年には、ホテルの飼育場である酒蔵を中心に「山口ふるさと伝承総合センター」が整備されました。同時に「大殿ホテルを守る会」が結成され、地域全体でホテルの保全活動を行う体制が整いました。ホテルの保全活動は、ふるさとの誇りとしてまちづくりの中心に位置付けられ、観光の目玉ともなっています。平成4年からは、毎年「ホテル祭り」を開催、多くの観光客を呼んでいます。



▲一の坂川全景（小山哲彦氏 提供）

### 【ホテル護岸】

ホテルの生息に配慮した護岸工法で、一の坂川のホテル護岸は、我が国初のホテル護岸の成功例とされる。一の坂川では、①蛇行や落差工により流速を低減、②地場産である萩の安山岩を使用し、深目地で多孔質空間を確保、③川沿いに桜など高木類を植栽し、川面に木陰を作る、の3点の工夫がなされている。

### 【「大殿ホテルを守る会」】

大殿小学校によるホテル飼育を支援する市民団体。明治時代の酒蔵（国文化財）がホテル飼育にちょうどよい温湿度を保てることから飼育小屋としており、平成3年、この酒蔵を中心に「山口ふるさと伝承総合センター」が整備されたのを機に、地域全体でホテル飼育を支援するために組織化された。



# 生物多様性でつなぐ“まちづくり” 市民・大学・行政の連携で流域再生

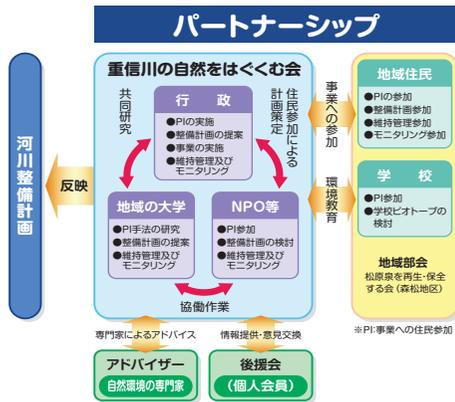


## 1 大学が中心となり民・学・官で「重信川の自然をはぐくむ会」設立

重信川は、地形・地質、気候等の自然条件に加え、都市化の進展等社会条件の変化により、瀬切れ範囲の拡大・水質の悪化・泉の消失・植生の減少・霞堤の環境悪化など、自然環境が大きく変貌し始めていました。

愛媛大学が中心となり、重信川の環境について考える「重信川講座」を開催、これを受講した大学生の意識が高まり、平成14年、学部を越えた大学生のグループ「重信川エコリーダ―」が結成されました。

翌年には、大学・市民団体・行政などのパートナーシップ組織「重信川の自然をはぐくむ会」が生まれました。



▲「重信川の自然をはぐくむ会」のパートナーシップ

## 2 「重信川いきいきネットワーク計画」の策定

「重信川の自然をはぐくむ会」は、重信川を軸に①水と緑のネットワークの形成、②自然と人・人と人がふれあう交流と学習の場の形成の2つを大きな柱として、川の自然再生や維持管理を、多様な団体や住民と協働して行ったり、環境学習の支援などを行っています。また、住民へのアンケート調査をもとに「重信川いきいきネットワーク計画」を策定、川のハード整備と環境学習プログラムなどのソフト支援との両面から、地域参加のよりよい河川環境づくりを推進しています。



▲みんなで「いきいきネットワーク計画」を策定

### 【重信川】

愛媛県のほぼ中央を流れる一級河川。元来は暴れ川で、流域には江戸時代に河川改修にあたって足立重信の名をとったと伝えられる。霞堤が多く残されている。東温市付近を扇頂として広大な扇状地(道後平野)を形成し、高低差の割に河川長が短いため氾濫しやすく、また流域の両岸には伏流水による湧水泉が多い。

### 【重信川の瀬切れと泉】

扇状地河川は流水が地下に伏流しやすいため、湯水時に瀬切れ(流水がなくなること)が発生しやすい。近年、瀬切れ期間・範囲面積の拡大が見られ、生物の生息環境への影響が懸念されている。泉は、伏流水が湧出したもので、水辺環境の再生のため、埋められてしまったものを復活させようという動きがある。

### 【主な保全種】

スジシマドジョウ:絶滅危惧Ⅱ類(VU)  
ヤリタナゴ:準絶滅危惧(NT)  
テイレギ・オオカワトンボ・カワセミ など



### 【担い手】

大学生のサークル活動による環境学習プログラム

## 3 松原泉・広瀬霞・河口ヨシ原の自然再生

平成16年からは松原泉の、平成18年からは広瀬霞の、平成20年からは河口ヨシ原の自然再生をスタートさせました。松原泉は昭和30年代の河川工事で埋め立てられ、運動公園となっていました。舗装をはがし、泉を復活させ、水を重信川につなぎ、かつての緑豊かな松原泉を再生させました。広瀬霞では、霞堤の開口部にあった湿地環境を復活させ、瀬切れ時に生物が避難でき、多様な生物層が息できる空間が創出されています。また、重信川河口は野鳥の飛来地として「日本の重要湿地500」のひとつに選定されていますが、近年減少してきたヨシ原の再生が行われています(平成23年度1期工事完了)。



▲地域住民が中心となつての松原泉の維持管理

## 4 大学生が主体となって行う環境学習

平成17年から毎年行われている「重信川クリーン大作戦」は、大学生の「重信川エコリーダ―」が主体となって開催し、環境学習ゲームを行うなど、住民に川に親しんでもらうプログラムで、毎回400人以上の地域住民が参加しています。重信川エコリーダ―は、重信川まるごと探検隊など、小学生の環境学習プログラムを行い、重信川と触れ合うための大人と子どもの架け橋として、活躍しています。



▲子どもたちのワークショップ

### 【霞堤】

堤防のある区間に開口部を設け、その下流側の堤防を堤内地側に延長させて、開口部の上流の堤防と二重になるようにした不連続な堤防。戦国時代から用いられており、霞堤の区間は堤防が折れ重なり、霞がたなびくように見えるようすから、こう呼ばれている。霞堤には2つの効果があり、1つは洪水を貯留する遊水効果ともう一つは、上流氾濫した水を川に戻す氾濫戻し効果がある。

### 【重信川の自然をはぐくむ会】

重信川の自然環境を保全・再生するため、平成15年に行政・大学・市民団体等で設立。「重信川いきいきネットワーク計画」を策定した。学識経験者や専門家による「アドバイザー会議」や各自然再生事業における地域部会を組織し、また誰でも参加できる「フォーラム」を定期的に開催し、情報交換・交流促進を行っている。

フィールド 油山自然観察の森 (福岡県福岡市)

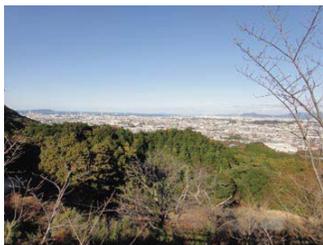
タイムフレーム



## 1 市民の憩いの場を市が買い取り保全

油山は福岡市民の憩いの場として親しまれ、小学校の遠足などに利用されています。福岡市は、明治百年を記念して油山を「市民の森」として施設整備を行い、昭和63年に「自然観察の森」を開園しました。

「自然観察の森」の運営を担っていた日本野鳥の会が「甲虫やチョウがたくさんいて、子どもたちが喜ぶ森にしよう」と市に提案したことがきっかけとなり、スギ・ヒノキの人工林をカブトムシが好むクヌギ・コナラの森として整備する活動が始まりました。



▲油山から博多湾を望む



▲植えられたばかりのクヌギ

## 2 「森を育てる会」を結成

「カブトムシの森」整備後の管理を考えるにあたり、市民参加の仕組みを取り入れるため、平成7年に福岡市が「カブトムシの森を育てる会」の設置を呼びかけ、現在の活動主体の母体が結成されました。その活動は、下草刈りや自然観察会などのイベントからスタートして、現在では市民が自主的に運営するボランティアグループへと発展しています。カブトムシだけの森ではなく、さまざまな昆虫や鳥、植物と触れ合える豊かな森づくりを目指して、翌年「森を育てる会」に改名されました。



▲下草刈りのようす

### 【油山自然観察の森】

標高597mの油山の中腹に位置し、「市民の森」(約71ha)と「油山牧場」(約47ha)に隣接した約23haの森。環境省自然観察の森整備事業により、昭和63年に設置された。敷地内に自然観察センターがあり、油山の自然に関する資料を展示するほか、「森を育てる会」等市民活動の拠点となっている。

### 【「カブトムシの森」基本計画】

平成4年に福岡市が策定。油山にカブトムシの森とチョウの楽園を整備することを目標に、牧場に近い林縁部のスギ・ヒノキ林を、クヌギ・コナラ林に転換し、カブトムシの成育に適した森づくりの方針が示されている。

### 【主な保全種】

アカマツ林:福岡市特定植物群落 など



### 【合意形成】

「うん・えー会」で  
賛否両論を出し合う

## 3 ワークショップと「うん・えー会」で計画策定

苗木だったクヌギやコナラは10年程で萌芽更新が必要になりました。平成11年、同会では今後の森づくりについて話し合うワークショップを開催し、「カブトムシの森」の管理計画と、貴重なアカマツ林の保全を行うことを決め、また勉強会や調査の必要性を確認しました。その結果を受けて、レンジャーや大学の先生を講師に勉強会を行ない、チョウやカブトムシの生息調査や植生調査などを開始しました。

日常的な保全活動は月2回程度実施し、同会の運営については、2ヶ月に一度の頻度で「うん・えー会」を開催し、活動しています。



▲森の将来像についてワークショップで話し合う

## 4 貴重なアカマツ林を守る

油山のアカマツ林は福岡県のレッドデータブックに貴重な植物群として登録されています。しかし、林床にはシダが繁茂し、常緑樹が樹上を覆い、マツクイムシの被害を受け、アカマツの生育環境は悪化していました。

アカマツ林の保全にあたっては、ワークショップで保全計画を作成しました。その計画にもとづき、常緑樹や竹の侵入を抑え、下草刈りや落ち葉かきを行ってアカマツの生育しやすい環境とする作業が開始されました。



▲アカマツ林の落ち葉かき

※写真はすべて、「森を育てる会」提供

### 【森を育てる会】

油山自然観察の森の保全活動を通じて、広く緑地保全活動を行う市民グループ。会員は、小学生から70歳代までの約80名。楽しむことをモットーに、カブトムシの森とアカマツの森の保全活動、自然観察会や樋井川散策など、月2回の活動を行っている。

### 【「うん・えー会」】

森を育てる会が2ヶ月に1度行っている運営会議で、会員は誰でも参加できる。市民の森の指定管理者の一般社団法人福岡市市民の森協会や自然観察センターも参加する。活動内容などについて「うんうん(賛成)」「えー!? (反対)」と、なんでも言い合うことができる会議となっている。

### Q.生物多様性地域連携促進法とは？

A.「地域における多様な主体の連携による生物の多様性の保全のための活動の促進等に関する法律(生物多様性地域連携促進法)」は、様々な立場の人が互いに連携し、生物多様性保全のために取り組む活動(地域連携保全活動)を促進することで、それぞれの地域における生物多様性の保全を図ることを目的として制定されました。法律では、地域連携保全活動に関する基本方針の作成(国)や活動計画の作成(市町村等)、計画に基づく活動に適用される特例措置のほか、協議会や支援センターの設置などについて定められています。

詳細は、HP(環境省>自然環境・生物多様性>生物多様性地域連携促進法)をご参照ください。

[http://www.env.go.jp/nature/biodic/act\\_promo/index.html](http://www.env.go.jp/nature/biodic/act_promo/index.html)

### Q.自然が多く存在する地域でも、生物多様性保全活動は必要ですか？

A.一見、自然豊かに見える地域でも、里地里山等に対する人間の働きかけが少なくなったり、外来種が人為的に持ち込まれたりすることによって、地域の生態系に影響が出ているかもしれません。自然の中にどのような生物が生息しているのか、まずは調べてみましょう。博物館での調査や文献調査、地域で保全活動に取り組んでいる方へのヒアリング等の方法があります。かつての地域の生活について高齢者に聞いてみると、当時の自然のありようについても知ることもできます。また、研究者などの専門家に見てもらうことで、その地域の自然の固有性が見出される場合もあります。絶滅危惧種やかつて身近に見られた生物が減少してしまった場合は、その保全について考える必要もあります。

### Q.なぜ、多様な主体による連携が求められているのですか？

A.地方公共団体やNPO等の民間の団体、地域住民、農林漁業者、企業、専門家など地域の様々な関係者がそれぞれ密接に連携した活動を行うことで、さまざまな効果が生まれてきます。人と人、人と自然のつながり、地域への誇りと愛着、そして地域の活力が生み出され、生物多様性の保全だけではなく、少子高齢化や過疎化等それぞれの地域が抱える課題を乗り越えるきっかけになることも期待されています。

### Q.生物多様性について、専門的な知識は必要ですか？

A.専門的な知識を有する大学や博物館等の教育・研究機関、生態学の専門家等が関わることで、科学的な知見に基づき、その専門的な知識を活かした活動が可能となります。地域の自然的・社会的条件に関する情報の収集・整理、活動計画や活動の実施に関する助言や指導、活動への参加を希望するNPO・NGO等や企業等の事業者に対する助言や連携のあっせん、科学的知見に基づく活動の重要性に関する普及啓発、活動を通じた環境教育・学習等の役割を担うことが可能となります。

### Q.多くの人々に参加してもらうためには、どのような工夫が必要ですか？

A.動植物の保護活動や防除活動、自然とのふれあい活動、農林漁業や観光、教育の一環としての活動など、多様な主体が、それぞれの立場から参加できるプログラムを用意することで、活動の広がりが生まれてきます。例えば、雑木林の下草刈りなど里山保全活動や外来種や国内移入種を駆除する活動、シカ等による食害防止など自然植生への被害を減らす活動、子どもたちによる身近な生きもの調査や自然観察会の開催、ふゆみずたんぼ等の生態系に配慮した農業、地域の自然資源を活用したエコツーリズムの開催等があります。

### Q.活動を持続させるには、どのような努力が必要ですか？

A.地域の生物多様性や人と自然との関わりが将来どのような状態になることを目指すのか、時間軸を設定してみましょう。10年後、20年後の地域の自然や人と自然との関わりについて望ましい姿を「長期目標」とした上で、その実現に向けた個々の活動の達成目標を「短期目標」として、時間軸を設定します。最初から長期目標ばかり意識するのではなく、身近な目標から着々と進めて、みんなのモチベーションを高めましょう。また、小学校での体験プログラムや教科との連携、大学や研究機関とモニタリングの共催、地元商店街と連携して保全活動によって生じる薪や山菜などの副産物の活用等、地域の特性に応じて活動の輪を広げることで、活動を発展させ持続させる方法もあります。

### Q.流域全体の活動に広げたいのですが、どのような方法がありますか？

A.すでに地域の一部での活動が定着している場合、より広域的な活動へと発展させるための手段として、関係市町村に地域連携保全活動計画の案の作成を提案することができます。その際には書類を提出するだけでなく、市町村の担当者と話し合い、提案への理解を促しましょう。地域連携保全活動計画の実施に伴う行為については、市町村が環境大臣又は都道府県知事に協議等を行うことにより、必要な手続等の簡略化などの特例措置を受けることができます。詳しくは、環境省が作成している「地域連携保全活動計画作成の手引き」をご覧ください。計画として成立すると、活動は行政等地域をあげて取り組むものとなります。

国土交通分野における地域の生物多様性保全活動の促進に関するセミナーを、平成23年度は関東地方(東京都港区)、中部地方(愛知県西尾市及び豊田市)、九州地方(福岡県福岡市)で計3回開催しました。生物多様性保全活動の方法論や多様な主体との連携のありかた等について知見を広く普及することを目的として、午前中はモデル事例のエクスカージョン、午後は専門家による講義とディスカッションという形式で行いました。関東地方では35名、中部地方では34名、九州地方では31名の方にご参加いただきました。

(関東地方)(お台場における活動は6頁参照)

港陽小学校の海の学習プログラムについては、PTA・漁業関係者・地域住民等が冬場の海中作業に協力する等、「お台場で育った子どもたち」にふるさとの海を伝える」という目的意識を持って協働し、さらに地域全体の収穫祭へ発展させようと取り組んでいる様子が、参加者にも熱く伝わってきました。講義では、東京湾は沖繩の海のように透明度は高くないが、プランクトンが多く豊かな生態系をもつ海であり、東京湾の豊かさを自覚することが重要ということも語られました。生物多様性の保全には、なんのために、どのような自然環境を保全・復元・創出するか、ビジョン(目標)を明確にもって活動することの重要性等が確認されました。

(中部地方)(矢作川流域における活動は20頁参照)

矢作川流域においては、下流域にある西尾市緑地公園における市民参加によるヨシ原再生、中流域にある豊田市中央公園における漁業関係者と市民との協働による河畔林整備など、市民・漁業関係者・専門家・行政等が連携し、流域全体での生物多様性保全活動が進められていました。また、豊田市児ノ口公園では、矢作川支流の五六川が再生され、田んぼや雑木林などが市民によって管理・運営されており、市街地の中心に小さなふるさとが創成されていました。園内に皆が集える拠点があることで、活動が円滑に行われていました。生物多様性活動には、道具置き場や人々の抛りどころとなる拠点づくりが重要なこと、また、アユの保全活動にアユ釣り愛好者が協力するなど、多様な主体がそれぞれの立場で行う活動に生物多様性を連動させることで、取組の促進が可能となること等が確認されました。

(九州地方)(油山自然観察の森における活動は30頁、樋井川流域における活動は12頁参照)

樋井川の源流にあたる油山自然観察の森では、市民による手作業でのきめ細かい手入れによって希少なアカマツ林の保全が行われていました。また、樋井川の中流域では福岡大学グラウンドの雨水貯留システムや家庭における雨水管理システムの構築、下流域では雨水排出のための河川改修、と都市型水害対策を講じつつ、シロウオの遡上や産卵場所への配慮もなされ、身近な防災の課題を生物多様性保全活動へと連動させていました。日本人は古来から海と山とのつながりを意識してきたように、水循環も生物多様性も人間の生活も、連鎖関係にあることを認識し、地域の課題を皆で解決していくことが重要ということ等が確認されました。

生物多様性の促進は、地域に恵みをもたらすものです。地域における生物多様性保全活動の普及には、地域の多様な主体が目標を持って、地域のさまざまな活動と連動させながら、地域に恵みをもたらすものだという認識を持って取り組むことが重要です。本冊子が、社会資本分野における生物多様性保全のための一助になることを期待します。

セミナーの実施および本冊子の作成にあたり、アドバイザー会議委員には貴重なご助言をいただきましたことに、感謝いたします。



▲セミナー(関東地方)の様子

## 生物多様性に関するインフォメーション

### ■生物多様性に関する基本情報や国の施策について

国土交通省 生物多様性保全に向けた取組 [http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/environment/sosei\\_environment\\_fr\\_000107.html](http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/environment/sosei_environment_fr_000107.html)  
環境省 自然環境・生物多様性(自然環境局) <http://www.env.go.jp/nature/>  
環境省 生物多様性-Biodiversity- <http://www.biodic.go.jp/biodiversity/>

### ■公園緑地における取組

国土交通省 都市の緑地等における生物多様性保全の取組事例 [http://www.mlit.go.jp/toshi/park/crd\\_parkgreen\\_tk\\_000005.html](http://www.mlit.go.jp/toshi/park/crd_parkgreen_tk_000005.html)

### ■河川における取組

国土交通省 水辺の環境について <http://www.mlit.go.jp/river/kankyo/index.html>  
独立行政法人 土木研究所 自然共生研究センター <http://www.pwri.go.jp/team/kyousei/jpn/index.htm>

### ■港湾・海辺における取組

国土交通省 港湾局の環境事業の紹介 <http://www.mlit.go.jp/kowan/ecoport/index3.htm>

### ■生物多様性に関する調査研究の支援・情報データベース

国土交通省 公園緑地関係データベース <http://www.mlit.go.jp/crd/park/joho/database/index.html>  
国土交通省 水文水質データベース <http://www1.river.go.jp/>  
国土交通省 河川環境データベース(河川水辺の国勢調査) <http://www5.river.go.jp/database/databasetop.html>  
国土交通省 海域環境情報提供システム <http://www.mlit.go.jp/kowan/ecoport/index.htm>  
国土交通省 国土技術政策総合研究所 <http://www.nilim.go.jp/>

### ■市民団体等に対する助成金などに関する情報

独立行政法人 環境再生保全機構 地球環境基金 <http://www.erca.go.jp/jfge/index.html>  
生物多様性民間参加パートナーシップ NGO等に対する助成金 <http://www.bd-partner.org/case/ngo/grant/>

